

## 詩誌 『詩研究』 『日本詩』

### I

昭和十八年十一月、内閣情報局は出版事業の統制強化を目的に、「出版事業整備要綱」を決定した。この決定に従い、出版業界の統制機関であった日本出版会は、出版社、雑誌の統廃合を推し進め、雑誌では国民雑誌系列、職能雑誌系列、特別雑誌系列の三系列に分類して整備された結果、国民雑誌系列二百五十八誌が八十八誌に、職能雑誌系列千三百三十六誌が七百十六誌に、特別雑誌系列四百二十三誌が百九十二誌と、企業整備前の二千十七誌が、十九年五月末には九百九十六誌にまで減少する状況<sup>(1)</sup>となっていく。詩誌でも有力詩誌を統合した『詩研究』が「国民雑誌・文芸雑誌部門・詩雑誌」、「日本詩」が「職能雑誌・文学雑誌部門・専門文学誌中詩育成誌」（『詩研究』「編輯後記」創刊号）として十九年六月に宝文館から創刊され、戦時下での詩誌の刊行はこの二誌のみとなった。

二誌の創刊については、編集担当者であった北村秀雄の回想や小川和佐氏の「戦時統制下の詩誌『日本詩』目録・解題」<sup>(2)</sup>での言及にあるように、情報局に勤務していた詩人佐伯郁郎の助言が創刊の契機となっていた。残存が決まっていた入門誌、研究誌の二種の詩誌として、宝文館で刊行

### 猪熊雄治

されていた『若草』『令女界』を振り分けてはとの佐伯の提案を受け、『令女界』の用紙割当実績をもとに入門誌の、『若草』の実績をもとに専門誌の創刊が図られ、「若草・令女界の改題・転進。詩研究・日本詩の創刊」（『詩研究』「編輯後記」創刊号）により、複数の詩誌を統合した二誌が登場することとなった。『詩研究』創刊号に載った「社告」では、創刊の経緯について、

創刊以来二十余年、絶大なる御支持を賜りました小社発行の「令女界」「若草」は、此度そろって詩雑誌に転進、改題、六月号より新発足することとなりました。

「若草」は、四季・歷程・蠟人形・文芸汎論を統合の上、総合詩誌「詩研究」「令女界」は、新詩論・詩洋・ポエチカ・若い人・詩歌少女を統合、育成詩誌「日本詩」と改題、情報局・出版会御指導のもと、新使命達成のために、勇躍前進いたします。

と語られ、統合の状況や二誌の方向性が告げられている。

このように「総合詩誌」「育成詩誌」といった二誌の方向が想定される一方、二誌の共通性もあわせて強調されていた。『日本詩』創刊号の「社告」

では、『詩研究』同様、『詩研究』の「総合誌として日本詩の最頂点をゆく編輯方針」と『日本詩』の「新人育成のために全力を傾注し行かんとする」方向が述べられるとともに、二誌の使命として「いづれも日本詩の公器として、情報局の指導下に万遺憾なき発展と発達を図らんとする」ことが告げられる。「本号に一億憤激米英撃擗の詩を特輯し、皇国の大勝を天地神明に謹むで祈り奉る。」(『日本詩』「編輯後記」十二月号)といったような姿勢から編集された二誌には、多くの愛国詩や復古主義的な批評、エッセイが掲載され、「文学的評価としては創刊より廃刊までを通じて殆ど見るべきものはない。」あるいは「文学的価値としては皆無に等しい……」(小川氏)<sup>(4)</sup>との酷評も与えられている。しかし小川氏は「いづれも日本詩の公器として」にうかがえるような、同人誌ではなく公器を目指した点に、二誌の「存在の意義」を求め、「……戦時統制という内務官僚の発想が、同人、結社を中心とした詩誌の形態に、新しい性格を創造したことはいかにも皮肉な史実であった。」<sup>(5)</sup>との総括も提示している。文学的な評価とは別に、詩誌刊行が二誌に限定されていた状況下で、ともに公器的な発表媒体であったことの資料的な価値はあらためて確認される必要があるのではないか。

『詩研究』創刊号「編輯後記」では、情報局より指名された九名(西條八十・尾崎喜八・神保光太郎・前田鉄之助・村野四郎・山本和夫・蔵原伸二郎・岩佐東一郎・勝承夫)の企画委員が二誌で共通し、企画委員会も同時に開催されるような「言葉どほりの姉妹誌」であることが記されているが、公器的性質の「姉妹誌」として創刊された二誌のうち、『日本詩』については、小川氏による解題や、全十冊を紹介した『現代詩誌総覧⑦—十五年戦争下の詩学—』<sup>(6)</sup>がある。

ここでは『詩研究』の終刊までの目次を紹介するとともに、公器性を基

盤とした二誌の求めた方向等について、少し眺めていきたい。

## II

創刊以後の二誌の軌跡を見れば、十九年六月の創刊号以後、二誌とも二十年一月号(二巻一号)なお十九年に刊行された号については以後年表示を略した)まで月刊を維持して八冊が刊行され、その後の刊行中断を経て、終戦後に二巻二号となる二十年十一月号と、三巻一号となる二十一年一・二月号の二冊がともに刊行されている。北村の回想では、発行所となった宝文館が、十九年十一月の空襲で日本橋の社屋が焼失し、滝野川の仮社屋への移転後に二、三号刊行されたものの、その後の製本所や印刷所の火災により発行不能のまま終戦となり、戦後は用紙実績を維持するために、疎開のため離京していた北村が編集に参加しないまま、『詩研究』『日本詩』の二十年十一月号が刊行されたとされる。『詩研究』の「編輯後記」を見ても、創刊号から十二月号までは「北村」による記述であり、その後二十年一月号には「後記」が見られず、終戦後の二十年十一月号の「編輯室より」の末尾には「香村生」による「尚ほ本誌は従来の編輯者帰郷のため臨時に私がやりました。」との記述が載っている。『日本詩』も同様に、創刊号から二十年一月号まで「編輯後記」を執筆していた花村奨に代わり、二十年十一月号の「編輯後記」には無署名による「これまでの編輯者が郷里に疎開してゐるため、私が臨時に、それも大急ぎで、まとめたので、意に満たぬところもあらうと察しますが、御了承を願ひます。」との記述が載せられ、二十年一月号まで編集を担当していた花村がやはり関与しない形で刊行されていた。二誌の最終号となる二十一年一・二月号については、それぞれの号に花村によるほぼ同文の「あとがき」があり、それによれば疎開していた期

間中に二誌の二十年十一月号が刊行され、二十一年一・二月号も既に編集済みであったため、二誌とも「あとがき」のみ花村が記したとされる。この「あとがき」とともに、それぞれの号にはやはり同文の「社告」も載り、「月刊形式による『詩研究』並に『日本詩』は本号を以て打ち切」ることが告げられ、あわせて季刊『詩研究』の創刊と『令女界』『若草』の復刊が予告されている。社告では季刊『詩研究』に吸収されるため、「『日本詩』のみを廃刊とします。」とされたが、北村の回想に「……つなぎに発行されたのも、一、二号らしく……『令女界』『若草』の復刊とともに完全に姿を消したようです。」とあるように、二誌は戦後編集者を替えて二冊刊行したが、二十一年一・二月号の刊行を以て、揃って終刊を迎えた。

このような「姉妹誌」性が目立つ二誌だが、二誌の頁数にはやや差があった。創刊号以下終刊号までA5判という体裁は一致するものの、『詩研究』では創刊号から十一月号までの六冊が三十二頁、十二月号と翌二十年一月号が十六頁であるのに対し、『日本詩』は、創刊号から八月号まで五十二頁、その後九月号〜十一月号が四十八頁、十二月号と二十年一月号が三十二頁となっている。頁数の差とあわせて定価も異なり、『詩研究』が創刊号から十一月号までが特別行為税を含めた四十二銭、十二月号と翌二十年一月号が三十五銭であり、『日本詩』は、創刊号から十一月号までが特別行為税を含め五十三銭、十二月号と二十年一月号が四十五銭となっていた。戦後刊行されたそれぞれの二号分については、二誌とも頁数は同一の十六頁で、定価も二十年十一月号が四十銭、終刊となった二十一年一・二月号が八十銭と同一であったが、戦中刊行分を見れば、『詩研究』の頁数は一貫して『日本詩』より少なく、『日本詩』に比べやや小ぶりの詩誌となっていた。

### III

二誌の誌面を見れば、やはり公器として多彩な詩人の寄稿が目につく。『詩研究』では、創刊号に三好達治、竹中郁、佐伯郁郎、佐藤一英、巽聖歌等による「特輯詩篇・二十一入集」が、続く七月号には菊岡久利、阪本越郎、安西冬衛、村野四郎等の「七月詩篇・十八入集」が生まれ、『日本詩』でも創刊号には大木惇夫、百田宗治、河井醉茗、千家元磨等の二十九編が、七月号にも斎藤忠、堀口大学、尾崎喜八等の二十編が載り、『日本詩』が自負した「日本詩の公器」にしてはじめて成し得る盛観（『日本詩』編輯後記・創刊号）の状況が二誌の誌面には現れている。その後も『詩研究』の「特輯・決戦詩集」（九月号）、「詩篇十二篇」（十月号）、「詩篇七人集」（十二月号）、「日本詩」の「新詩十篇」（八月号）、「新人作品特輯」（十一月号）の企画が生まれ、ともに著名な詩人から、中堅新進に至る幅広い詩人たちの作品が掲載されている。さらに詩作品以外でも、二誌の七月号での津村信夫の追悼企画や、「国民詩劇特輯」（『詩研究』八月号）、「詩論特輯」（『詩研究』十一月号）、「高村光太郎の作品研究」（『日本詩』創刊号）、「サイパンの英霊に誓ふ」（『日本詩』八月号）、「評論特輯」（『日本詩』九月号）等の特集が生まれ、頁数の少ない詩誌であったが、登場した執筆者の多さや特集企画による誌面作りを通して、詩壇の公器が目指されていた。戦時性の強さが目立つ半面、村野四郎「日本詩講座」（『日本詩』創刊号〜十二月号）のように「戦争協力とは距離をおいた」<sup>7)</sup>連載も掲載され、単色ではない誌面構成となっているのも、公器的性格がもたらした効果かもしれない。

先述の通り、公器として「姉妹誌」であった二誌には、「綜合詩誌」や研究誌、「育成詩誌」、入門誌の方向も求められていたが、二誌にはそれぞれ

れの性格を追求していく誌面も構成されていた。まず『日本詩』の「育成詩誌」性から見れば、創刊号に九編の詩を掲載した「新人作品集」欄を設置し、「有能なる新人の出現を待望し優秀なる作品は本欄に推薦する。」との告知を載せ、積極的に新人を起用していく方向を打ち出していた。『詩研究』でも創刊号と七月号に同文の告知を載せるが、『日本詩』ではこの姿勢をさらに強め、七月号からは募集要項も大きく揭示し、「一億挙げて戦闘の列伍につらなるこの秋、烈々たる愛国の至情は若き胸裡にみなぎつて熱い。」といった表現や、「とくに前線、職場の有能なる詩人の登場を待望」するとの告知により、読者の投稿意欲を促す姿勢を強調していく。こうした告知に応えるように、八月号には読者からの「山積せる投稿」（『サイパン』の英霊に誓ふ！「序」）が寄せられたとされ、その中から一番多く投稿されたサイパン島玉砕を素材にした詩五編を特集の中で佐伯郁郎、菊岡久利、与田準一のエッセイとともに掲載するといった厚遇措置も取られていた。以後も新人作品を誌面に登場させる姿勢は継続され、十一月号では「本号頁の大半をあてて新人作品を特輯した」（編輯後記）「新人作品特輯」が生まれ、三好達治、深尾須磨子、野長瀬正夫、長田恒雄、前田鉄之助、江口榛一が推薦した七名を含めて、二十三編の作品が掲載され、さらに戦中刊行分では二十年一月号でも十五編による「新人詩篇」が特集として編まれていった。

このように「育成詩誌」として、『日本詩』は新人作品の掲載を推進していくが、注目されるのは、『日本詩』以前から活発な詩作活動を展開し、戦後も活動を継続させていく詩人たちが登場していくことである。例えば創刊号「新人作品集」には国友千枝、田久徳蔵、久野斌の三作品も含まれていたが、国友は『日本詩』以前は、村野四郎と北園克衛が編集していた

『新詩論』（昭十七〜十八）へ投稿し、また『日本詩』創刊とほぼ同時期に北園が刊行し始めた小冊子『麦通信』（昭十九〜二十）の会員としても活動し、戦後も北園、岩佐東一郎編の『近代詩苑』（昭二十一）に寄稿していく。田久も『新詩論』『文芸汎論』や『傷痕軍人詩集』<sup>8)</sup>に作品を載せ、戦後は『純粹詩』（昭二十一〜二十三）に寄稿し、久野も『日本詩壇』への寄稿や秋谷豊が主宰していた『地球』（第一次 昭十八〜二十一）に同人参加していた経歴を持ち、『現代詩』（昭二十一〜二十五）に作品を発表していく。続く七月号「新人詩篇」欄には、『若草』への投稿を重ねていた大上敬義の名が見えるが、大上は八月号、九月号にも作品が掲載されるとともに、『地球』の同人でもあった。

以後も有力な新人の登場が続き、十月号の「新人集」には泉沢浩志、鳥居良禅の、十一月号の「新人作品特輯」では、池端かつ代、五百旗頭欣一、塩田満留雄、相田謙三の作品が掲載される。六名は先の四名同様、『日本詩』創刊前から詩作を始め、戦後も『近代詩苑』や『純粹詩』、『新詩派』（昭二十一〜二十五）、『ルネサンス』（昭二十一〜二十三）等に寄稿し、戦中から戦後へと途切れることなく詩作を続けていく意欲的な新進詩人であった。このうちの泉沢と相田が『地球』に参加し、さらに相田は鳥居、五百旗頭とともに『麦通信』の会員でもあったように、泉沢等は『日本詩』以外の表現の場も求めていたが、表現意欲を抱えていた新進にとって、『日本詩』は、自己の作品を広く公表できる貴重な場となっていた。その後も、泉沢は二十年一月号に、相田も二十年一月号と終戦後の二十年十一月号と『日本詩』で掲載を重ね、泉沢の「樫の木の歌」と、相田が二十年十一月号に発表した「春二題」の二作品は、『現代詩手帖』（二〇二五年八月号）の特集「戦後70年、痛みのアークイヴ」で編まれたアンソロジー「一九四五年

詩集」に収録されている。このアンソロジーの解題となる対談<sup>(9)</sup>では、編者の平林敏彦氏と南川隆雄氏の両氏から泉沢の「樫の木の歌」についての言及があり、平林氏が「戦争に引き裂かれる人間の悲哀をテーマにした」作品の一例としてあげ、南川氏もまた戦時中作品を選ぶ当初の「画一的なものが多くなる」との予想を覆した「多彩な内容」の一つとして、「帰還を望めない出征に先立ち、家族や友人との別れを詠った作品」である「樫の木の歌」を紹介している。

このような新人紹介の推進とあわせて、『日本詩』は詩壇から離れた場所での詩作活動にも視線を向けていた。七月号から大きく掲載された募集要項では詩、詩論だけではなく、職場での詩朗読報告や、勤労詩人の生活報告等の「職場の報告」も募集され、誌面でも専門詩人でない詩作者の活動に注目した企画が掲載されていく。創刊号には近藤東が自身の職場でもあった鉄道現場での詩作活動を紹介した「輸送戦士の詩」と、『傷痍軍人詩集』を紹介した安藤一郎の「傷痍軍人の詩について」が載り、以後も七月号に工場勤務者の作品を紹介した阪本越郎「生産陣に戦ふ人の詩」が、八月号には『傷痍軍人詩集』の編者であった寺田弘「白衣の勇士の詩」が掲載される。これらの報告と照応する職場や病院からの報告としては、十一月号の「詩の道場」があり、病院での活動をまとめた傷痍軍人小野八寿男の「小さい願ひ」、工場での活動を報告する小笠原良一「乏しく光る」、篠原富蔵「工場より」の三編が収められている。このような工場や病院での活動に注目する様々な企画にも、新人の出現を期待する『日本詩』の「育成詩誌」としての性格が現れていると思われる。

#### IV

一方、『詩研究』の研究誌や「総合詩誌」としての方向については、二つの側面からうかがえるのではないか。その一つとして批評欄の重視があげられる。『詩研究』『日本詩』とも毎月評論を載せ、さらに『詩研究』では十一月号に「詩論特輯」が、『日本詩』でも九月号に「評論特輯」が組まれるように、二誌とも詩論の掲載にも力を注いでいた。加えて『詩研究』では、戦中刊行分のうち、十九年八月号を除く七冊に、「詩人常会」（創刊号〜七月号）「詩人道風」と題したコラム欄が設置され、毎月三人から五人の詩人が、詩や詩壇状況をめぐる様々な問題についての短い論評を寄稿していた。目に付くのは、これらの論評の中で、複数の詩人による、愛国詩についての批判的な言及が見られることである。愛国詩への疑問は『詩研究』以前から既に語られ、例えば十二月号の「詩人道風」に「詩人の方法」を載せた長田恒雄は、「詩壇一年」（『文芸汎論』昭十七年十二月号）の中で、

……「国民詩」とか「愛国詩」とか言ふ名のもとに、非常に妥協的な、通俗的な、その点ではかつての流行歌と同質の詩への冒瀆をなしてゐる作品群が出て来てゐることを警戒しなければならぬと痛感してゐる。

と述べ、愛国詩に見られる傾向への疑問を記していた。「詩人の方法」には愛国詩の用語は見えないが、「……すでに出来上がった何事かを内に持ち、それを述べ伝えるといふ方法は、詩人の方法とは言ひがたい。」等の表現で、愛国詩への疑問を記している。

「詩人常会」「詩人道風」には長田と通底するような視点からの批評が多く掲載され、今村冬三氏が指摘したように、二誌の誌面に「愛国詩批判の

言葉が期せずして並ぶ」ことが確認できる。今村氏は二誌から九か所の記述を引用しているが、そのうちの六か所（城左門「愛国詩につき」創刊号、野田宇太郎「一つの覚書」創刊号、塩野筍三「一人から一人へ」創刊号、安藤一郎「愛国詩の道」七月号、喜志邦三「詩・技術・批評」九月号、近藤東「副詞ぬきの文学」十二月号）は「詩人常会」「詩人道風」に掲載されたものであった。今村氏が引用した箇所以外でも、「詩人道風」欄には、「詩人の方法」を含め、「今日までの国民詩は、旧来の古い詩精神と技術によつても充分に間に合つた文学であつたといふことが出来る。」（村野四郎「新しき抵抗について」十月号）や「……このごろの詩の中に、ややもすれば詩精神の発動よりも鍛錬されてゐない言葉の濫費を感じる。」（岡本潤「ロダンの言葉」に関連して）十月号）といった記述が見られ、同時代詩の表現や質への疑問が重ねて表明されている。『日本詩』にも今村氏が引用したように、当時の潮流への危惧は見られるが、質や表現を重視する視点を継続的に示した点に、『詩研究』の研究誌的な性格が現れているのではないか。

さらに今一つ、『詩研究』の研究誌性、専門誌性を示すものとして、詩の新ジャンル創出を目指した姿勢もあげておきたい。八月号では「国民詩劇特輯」として、山本和夫『「国民詩劇」宣言』と、詩劇作品である菊岡久利「ふるさと派」、与田準一「青い道」の二篇が掲載され、「国民詩劇」と名付けられた叙事詩の創作、普及が提唱されている。「民族の一大叙事詩」（『編輯後記』八月号）となる「国民詩劇」は、山本によれば、「……アジアの原理を謳歌する精神を詩で歌ひ」「紙芝居や幻燈や移動劇を使つて、民衆に、うつつへ」るために創作される詩であり、朗読詩運動で実践されてきた「宣誓詩」「宣誓劇」とは「形式的には兄弟」「精神も、また、姉妹」になるとされる。八月号「編輯後記」でも、「国民詩劇」を「叙事詩の発展、

朗読詩前進」として位置付け、山本同様、放送や移動劇団、素人劇団への作品提供が推奨され、詩人による「新風」と運動の継続が強調される。

「国民詩劇」が提唱するような方向については、『詩研究』創刊前から言及されてきたもので、例えば『詩研究』の二十年一月号に国民詩劇の一作「鉄道旗の下に」を発表する近藤東は、「朗読詩の流行」（『文芸汎論』十八年四月号）の中で、朗読詩の性格の一つとして、「劇芸術への接近」をあげ、「新しい朗読詩は色々な意味で劇詩といふ形式をとるのが本當のやうな気もする。」との期待を述べていた。また『文芸汎論』の十八年八月号では「特輯・叙事詩の問題」が編まれるように、詩壇では叙事詩への関心も強く、「国民詩劇」は「……それ自体演劇への志向を内包していた朗読詩運動の延長に時局的な叙事意識が会つて発想」（坪井秀人氏<sup>(1)</sup>）された新しい詩形態といえる。八月号「編輯後記」の記述通り、その後も西村皎三「施設部隊の歌」（十月号）、南江治郎「暉」（十一月号）、近藤東「鉄道旗の下に」の三編が誌面に発表されるが、「この詩劇運動をも開花発展させたい」（『編輯後記』十一月号）と詩の新たな可能性を求めていく方向にも、翼賛姿勢が際立つ半面、『詩研究』が目指した専門誌性の追求をうかがうことができる。二誌については、安藤一郎が「このところ、二誌共、模索の域を脱せず、詩界全体の期待を満たすには、未だ遠い感がある。」（『日本詩』「昭和十九年の記録 詩界」十二月号）とした後、『詩研究』への「思い切つて高級の、気品に富むもの」、『日本詩』への「常に若々しく、青年の盛り上がる意気に応じるものとなること」との期待を語っていた。創刊当初に示された二誌の方向の一層の追求が求められた訳だが、先に見た通り、安藤の期待が述べられた次の号で二誌の刊行は中断することとなった。

戦後刊行されたそれぞれの二誌については、花村が「……本誌の様相の変化にも、実はおどろきました。」(『詩研究』「あとがき」二十一年一・二月号)と述べるように、時代情勢の急変を踏まえた誌面が現れていた。『詩研究』の二十年十一月号では、笹沢美明「新文学の誕生を切望する」、勝田香月「新人群り出でよ」、渡辺渡「農耕民族の詩」と三編の批評が並べられ、戦後を意識した誌面作りが早速なされている。特に勝田の論は詩人の戦争責任を糾弾したもので、「戦時中、多くの戦争詩を生んだが、今後は之等は完全に払拭されねばならない。」(『編輯室より』二十年十一月号)とした誌の姿勢を現した掲載となっている。しかしこのような素早い転換が見られる半面、中国東北部(旧満洲)を舞台にした異聖歌の詩を掲載するように、新しい時代潮流を誌面に組み入れながら、誌面構成には従来の色彩も残存している。この傾向は『日本詩』の二十年十一月号からもうかがうことができる。この号でも戦争指導者を非難する勝田の「公憤語録」が載る一方で、一月号「新人詩篇」の作品を批評した木村利行「新年号新人作品評」も掲載され、戦中の号との繋がりも意識されている。二誌に収められた詩について、杉浦静氏は「……ほとんどの詩が戦中の郷土詩と同じものか文語調の詠嘆詩」と指摘したが、それまでの傾向を継承しつつ、戦後の潮流を急遽加えたような編集内容といえるのではないか。

終刊号となるそれぞれの二十一年一・二月号にも同様の傾向が見られ、『詩研究』では勝田の「新日本詩壇の動向」の論調と、掲載された詩との落差の大きさが目に付く。『日本詩』でも、井上光晴が編集した『新日本プロレタリア詩集』<sup>(13)</sup>に収められた勝田の「黎明に歌ふ」(一・二月号)が載

る一方、「新人詩抄」に収められた作品の多くからは、従来の誌面で掲載された作品との類縁がうかがえる。新たな潮流も誌面に組み入れる形で戦後の二冊を刊行したものの、従来からの色彩を強く残したまま、『詩研究』『日本詩』はともに終刊されている。

注

- (1) 「第3部年表」(荏司徳太郎・清水文吉編『資料年表日配時代史―現代出版流通の原点』昭和五十五年十月 出版ニュース社)
- (2) 北村秀雄『日本詩』と『詩研究』(『詩学』第16巻10号 一九六一年九月)
- (3) 小川和佑「戦時統制下の詩誌『日本詩』目録・解題」(『昭和文学研究』第10集 昭和六〇年二月)
- (4) 小川和佑「昭和前期詩誌解題」(『講座・日本現代詩史』第三巻 昭和四十八年十一月 右文書院)
- (5) 注(3)と同じ
- (6) 『現代詩誌総覧』⑦ ―十五年戦争下の詩学』(現代詩誌総覧編集委員会編 一九九八年十二月 日外アソシエーツ)
- (7) 沢豊彦「日本詩」(安藤元雄・大岡信・中村稔監修『現代詩大事典』二〇〇八年二月 三省堂)
- (8) 寺田弘編『傷痕軍人詩集』(昭和十八年十一月 四季書房)
- (9) 平林敏彦・南川隆雄「戦中戦後を貫く詩魂」(『一九四五年詩集』解題)(『現代詩手帖』二〇一五年八月号)
- (10) 今村冬三「幻影解『大東亜戦争』」(『幻影解「大東亜戦争」―戦争に向き合わされた詩人たち―』一九八九年八月 葦書房)
- (11) 坪井秀人「モダニストと勤労詩―戦時期の近藤東―」(『声の祝祭』一九九七年八月 名古屋大学出版会)

(12) 杉浦静「詩壇の公器」の再生―「戦後詩」誌の初発（『戦後詩誌総覧②』）

戦後詩のメディアⅡ「詩学」「詩と批評」「詩と思想」（和田博文・杉浦静編）

二〇〇八年十二月 日外アソシエーツ）

(13) 井上光晴編『新日本プロレタリア詩集』（昭和二十一年八月 九州評論社）

資料調査では、神奈川近代文学館、鶴見大学図書館、大谷大学図書館、愛知大学豊橋図書館、大妻女子大学総合情報センター図書館、秋谷豊詩鳩館、本学図書館近代文庫のお世話を頂いた。また『現代詩1920―1944―モダニズム詩誌作品要覧』（和田博文監修 二〇〇六年十月 日外アソシエーツ）、『現代詩誌総覧⑤』―都市モダニズムの光と影Ⅰ（現代詩誌総覧 編集委員会編 一九九八年一月 日外アソシエーツ）、『現代詩誌総覧⑥』―都市モダニズムの光と影Ⅱ（現代詩誌総覧 編集委員会編 一九九八年七月 同右）、『現代詩誌総覧⑦』―十五年戦争下の詩学（現代詩誌総覧 編集委員会編 一九九八年十二月 同右）、『戦後詩誌総覧②』 戦後詩のメディアⅡ 「詩学」「詩と批評」「詩と思想」（和田博文・杉浦静編 二〇〇八年十二月 同右）、『戦後詩誌総覧④』 第二次世界大戦後の〈実存〉と〈思想〉（和田博文・杉浦静編 二〇〇九年六月 同右）、『戦後詩誌総覧⑤』 感受性のコスモロジー（和田博文・杉浦静編 二〇〇八年十一月 同右）、『秋谷豊公式ホームページ「秋谷豊資料室」www.akiya-yutaka.com/index.html』を活用させて頂いた。併せて厚く御礼申し上げます。

以下に『詩研究』創刊号から終刊号（昭和十九年六月〜昭和二十一年一月）までの目次を掲げる。

【凡 例】

- ・号数表示は目次に従い、発行日を付加した。
- ・目次記述を基本として作成したが、目次と内題が相違する場合は内題を記述し、目次に記載がない、あるいは注記等が必要な場合は「」内に加筆した。
- ・原則として新字体表記に改めた。

『詩研究』目次

六月創刊号・第一巻第一号（昭和十九年六月一日発行）

詩人の使命（巻頭言）	井上 司朗	1
日本詩歌の源流	保田與重郎	2
与謝野鉄幹	山本 和夫	12
特輯詩篇・二十一人集		15
春の旅人	三好 達治	6
麦のなかの女	竹中 郁	6
西郷隆盛―その一（目次では「西郷隆盛」）	佐伯 郁郎	7
雪	佐藤 一英	7
蛙しば鳴く	巽 聖歌	8
ばうせきの煙突	小野十三郎	8
押川春浪氏	岡崎清一郎	9
日の本の酒 征旅酒に寄せて国を懐ふ歌二篇（目次では「日の本の酒」）	大木 惇夫	30
オランダ酒場にて（目次には記載なし）		31
日の本の酒（目次には記載なし）		10
従軍詩篇マライの点描（目次では「マライの点描」）	北川 象一	16
富士	木原 孝一	16
行軍征歌	小池 吉昌	19
帰郷（目次では「帰京」）	加藤竹次郎	19
出撃―基地風景（目次では「出撃」）	高田 新	20
わが焦立ちの中の風景	丸山 薫	20
高原の村にて	野長瀬止夫	24
		25



山村二題	田中 冬二	25	国民学校	竹村 俊郎	9
ほととぎす〔目次には記載なし〕		25	機密兵器生産の土に贈る	平田内蔵吉	9
麴〔目次には記載なし〕	北園 克衛	25	葦の葉もてしるす〔目次では「葦の葉もてしるす」〕	深尾須磨子	14
夏	大木 実	25	浮雲に寄する	川田 総七	14
笛	岡本 潤	26	鉄について―応徴日記〔目次では「鉄について」〕	久須 耕造	18
登高四章	渡辺 渡	27	初夏	五百旗頭欣一	18
北の守備線	杉山 平一	31	夢の救ひ	木村 宙平	19
港	杉山 平一	31	町の音	菱山 修三	19
球〔目次には記載なし〕	井上 康文	31	いま着きぬ	与田 準一	24
前線と詩魂	菊岡 久利	28	梅田雲浜	山本 和夫	24
詩人常会	野田宇太郎	28	青葉若葉	前田鉄之助	25
提言	城 左門	19	山の讃歌	真壁 仁	25
一つの覚書	塩野 筍三	22	母	三ッ村繁蔵	26
愛国詩につき	(北村)	22	臣民の道	上田 静栄	26
一人から一人へ	尾崎 喜八	23	詩人常会	春山 行夫	27
編輯後記〔目次には記載なし〕	保田與重郎	32	共栄圏の詩人	仲村 久慈	32
七月号・第一卷第二号〔昭和十九年七月一日発行〕	神保光太郎	1	積極的活動を	安藤 一郎	17
詩人言〔巻頭言〕	菊岡 久利	20	愛国詩の道	岩沢 美明	17
日本詩歌の源流(一)(目次にはナンバーなし)	阪本 越郎	20	希望の中から	津村 信夫	28
北村透谷	安西 冬衛	23	提案二三	岩佐東一郎	28
七月詩篇・十八人集	村野 四郎	7	梨の実(遺稿)	津村 信夫	29
秀三先生お召		6	津村信夫年譜〔目次には記載なし〕	津村 秀夫	10
山径		7	臨終前後―弟信夫について―〔目次では「弟信夫の臨終前後」〕	劉 寒吉	10
鉄量に鉄量を		7	戦ふ北九州		12
田園の肖像		8	編輯後記〔目次には記載なし〕		12
		8			30
		9			31
					32

八月号・第一卷第三号（昭和十九年八月一日発行）

敵撃滅へ（巻頭言）

日本詩歌の源流（三）（目次にはナンバーなし）

日本歴史と詩精神

ただ勝利あるのみ

詩篇

単独飛行第一日

白壁に賦す

九段の鳩

夏

兵村の月

ゆめ

甲斐山川抄

詩集「戦闘機」について（目次では「戦闘機について」）

一言

苦言

白衣詩抄

石斧

全治の療友をうたへる（目次では「全治の療友を歌へる」）

夕べが来た

夜行軍

国民詩劇特輯

『国民詩劇』宣言（目次では「国民詩劇宣言」）

国民詩劇ふるさと派（目次では「ふるさと派」）

国民詩劇青い道（目次では「青い道」）

編輯後記（目次には記載なし）

九月号・第一卷第四号（昭和十九年九月一日発行）

睡蓮の花（巻頭言）

「をぢさんの詩」研究

島崎藤村

そのころの鷗外

特輯・決戦詩集

仏院の冥想

いくさうた

紅蜀葵と夏萩と―或は「誠の道へ」―（目次では「紅蜀葵と夏萩と」）

勝利ノ子

サイパンの童たちを悼む

決戦日日

サイパンの同胞に寄す

不滅の分身

怒りを応ふ

その一人

もういちど

勤勞奉仕

民族の慟哭

蓆

あの瞳

戦列に就く者

与田 準一

（北村）

河井 醉茗

尾崎 喜八

伊藤 信吉

松本 吉次

野口米次郎

南江 治郎

笹沢 美明

近藤 東

安藤 一郎

長田 恒雄

伊福部隆彦

上田 保

八十島 稔

喜志 邦三

宮崎 丈二

藤浦 洸

藪田 義雄

佐川 英三

江間 章子

横山 青娥

32

28

1

2

20

28

6

7

7

8

9

12

13

14

15

16

17

18

19

24

25

26

27

昭和十九年夏	杉山 平一	5	満天の星	小野十三郎	15
詩人道風			征途	小林 善雄	16
詩の力	阪本 越郎	10	柘榴	梶浦 正之	17
純粹のこと	三ッ村繁蔵	10	声	江口 隼人	32
詩・技術・批評	喜志 邦三	11	詩人道風		
編輯後記〔目次には記載なし〕	(北村)	32	新しき抵抗について	村野 四郎	12
			除草漫語	深尾須磨子	12
十月号・第一卷第五号 (昭和十九年十月一日発行)			『ロダンの言葉』に関連して〔目次では「ロダンの言葉」に関連して〕	岡本 潤	13
詩人の「まこと」(巻頭言)〔目次では「詩人のまこと」(巻頭言)〕	笹沢 美明	1	放送のための国民詩劇施設部隊の歌〔目次では「施設部隊の歌(国民詩劇)」	西村 皎三	27
古代歌謡と詩精神	藤田徳太郎	7	編輯後記〔目次には記載なし〕	(北村)	32
詩の方向	山本 和夫	18			
詩篇十二篇		21			
青穹賦	三好 達治	2	十一月号・第一卷第六号 (昭和十九年十一月一日発行)	菊岡 久利	1
サイパン失陥に激す	前田鉄之助	3	中国への思ひ(巻頭言)		
荒野の夢の彷徨圏から(十三分ノ一章)〔目次では「荒野の夢の彷徨圏から」	吉田 一穂	4	詩論特輯		
我が征く朝に	木下 夕爾	5	機械に対する日本人の思想	大江 満雄	2
萩の葉抒情	白井喜之介	6	械に対する日本人の思想	安藤 一郎	10
慈雨を乞ふと慈雨を讃ふの賦竝に豊作を禱るの辞			現代詩論	木下常太郎	16
一、慈雨を乞ふの賦	江口 榛一	22	葡萄〔目次では「葡萄他一篇」	佐藤 一英	6
二、慈雨を讃ふの賦		23	秋思二題	城 左門	6
三、豊作を禱るの辞		23	麦の詩	野長瀬正夫	7
〔目次では「慈雨を乞ふの賦他二篇」		24	在りし日の中国の詩人達に―わが友赤木健介著す「在りし日の東洋詩人たち」なる評論集あり、依倣して題す。〔目次では「在りし日の中国の詩人達に」	岡本 潤	8
参宮線にて	安西 冬衛	24			9
厳然たり 航空母艦にて〔目次では「厳然たり」	井上 康文	14			

詩人道風									
一つの期待	北園 克衛	14							
恐怖	小林 善雄	14	15						
唇頭の灰	中桐 雅夫	15							
白明の頌	福田 正夫	20							
戦ひの日の恋	北村 喜八	20	21						
弾丸	伊波 南哲	21	22						
日曜亭	村上菊一郎	22	23						
大人の背なかに圧倒されて	山田岩三郎	23							
家	国吉 真善	24							
中秋	一瀬 稔	24	25						
凧	菊池 正	25							
国民詩劇暉（みひかり）（目次では「暉（みひかり）国民詩劇」）	南江 治郎	26	32						
編輯後記（目次には記載なし）	（北村）	32							
十二月号・第一卷第七号（昭和十九年十二月一日発行）									
詩人の任務（巻頭言）	村野 四郎	1							
詩なきアメリカ	中野 繁雄	2	4						
攘夷の詩人たち	田辺耕一郎	12	15						
詩篇七人集									
旅愁・哀別	西條 八十	5							
草莽の母	阪本 越郎	5	6						
父の手	三ッ村繁蔵	6	7						
山縣大士の墳墓にて	杉原邦太郎	7	8						
秋風賦（目次では「秋風譜」）	浅井十三郎	8							
飛行場にて									
望郷歌	殿岡 辰雄	9							
詩人道風	柴山 群平	16							
詩人の方法	長田 恒雄	10							
副詞ぬきの文学	近藤 東	10	11						
「段込み」について	宮崎 丈二	11							
編輯後記（目次には記載なし）	（北村）	16							
新年号・第二卷第一号（昭和二十年一月一日発行）									
我観反歌論	伊福部隆彦	6	9						
詩を思ふ	上田 保	14	16						
移動演劇用国民詩劇 鉄道旗の下に（目次では「鉄道旗の下に 国民詩劇」）	近藤 東	3	5						
戦塵詩篇 加藤少将	増田 晃	10	13						
加藤少将									
マンダレー進駐									
土田忠									
張家集									
窓									
岳州をたちて									
詩人道風									
詩的雰囲気	山中 散生	1							
葦原の歌	小野十三郎	1	2						
壕の中で	八十島 稔	2							

十一月号・第二卷第二号（昭和二十年十一月一日発行）

新文学の誕生を切望する―若い世代に与へて―〔目次では

「新文学の誕生を切望する」

成吉思汗の冬

笹沢 美明  
巽 聖歌

1  
3

成吉思汗にて

4  
5

北辰寮

5

雅魯河

5  
6

匪団

6

出荷期

7

新人群り出でよ―日本詩壇の動向―〔目次では「新人群り

出でよ」

勝田 香月

8  
12

農耕民族の詩

渡辺 渡

13  
15

編輯室より〔目次には筆者名記載なし〕

（香村生）

16

一・二月号・第三卷第一号（昭和二十二年一月一日発行）

いいお年を

井上 康文

2  
5

新日本詩壇の動向―既成詩壇の崩壊と新興詩壇の胎動―

〔目次では「新日本詩壇の動向」

勝田 香月

6  
9

新しき道

井上 淑子

10

北へ帰る 宿にて〔目次では「北へ帰る」

北山冬一郎

11

詩歌作家へ〔目次には記載なし〕

木村 捨録

12

出版界肅清令と詩壇〔目次では「出版肅清と詩壇」

関東 詩人

13

幼い日のやうに

菊池 正吉

14

月下の彷徨

古林 謙二

14  
15

詩〔目次では「一つの詩」

谷 哀水

15

朝山に

あとがき〔目次には記載なし〕

中島 達夫 15  
花村 奨 16

（いのくま ゆうじ 日本語日本文学科）